
Disorderly World ~ 無秩序な世界 ~

SIX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Disorderly World 〱 無秩序な世界〱

【Nコード】

N5232Y

【作者名】

SIX

【あらすじ】

今から数百年以上も未来、依頼を請負い殺人を犯す殺し屋^{アサシン}『シュウジ・カザミ』、殺し屋を始末する掃除屋^{スワイパー}『ノア・アンダーソン』そして、大富豪の娘『アンジェリカ・アウロフ』。数奇な運命によって出会った三人が、小さな物語を紡ぎだす。果たして三人を取り巻く運命とは……。そして、敵対関係にある二人の未来とは……。

冒頭 く世界の在り方

この世界に『西暦』と呼ばれる暦しよふは存在しない。

今から数百年前、第四次世界大戦が勃発し、世界の地形は大きく変化した。

とある国の核ミサイル発射による第三次世界大戦の教訓から、各国が自衛の為に核を保有。だが、結果としてそれが第四次世界大戦の引き金となったと言われている。

世界の空を核ミサイルが飛び交い、戦争は年越しを待たずに終戦、世界から『文明』と『国』を奪い去った。世界総人口は一時、500万人にまでなったと言われている。

その世界を生き延びる為、人々は島国・種族・文明を捨てざるを得ず、数々の国の人々が協力し合い、放射能汚染の少ない地域に移り住み、小さな村・街を築いた。

これが、この世界の歴史だと言われている。

残念ながら、この世界には過去を記した書物の殆どが存在せず、口伝いや古びて文字の擦れた書物のみで過去を垣間見えるだけであり、当時を生き抜いた人々が当時を記した書物を残さなかったが故に、第四次世界大戦前後、或いはそれ以前の記録はほぼ存在しない。そしてそれは街の発展などにも影響し、過去に開発された数多くの発明も存在を知りつつも原理を知る者も少なく、中途半端な文化と文明のみが滞在し、また数多くの国の人々が混在する街は、読者様の思うところの過去と現在が合わさったような風体と化していた。また、言語は数々の国の言葉が合わさり、この世界特有の言語が使われている。

最初に記した通りこの世界には既に『国』と呼ばれるモノは存在せず、西暦は第四次世界大戦時より曖昧と化し、現在が何年なのかを知る術は無い。ただ、正確に伝えたとすれば、週月日は存在するが、第四次世界大戦時に地球上の気候が変化し、果たして今の月日と過去の月日とが一致するかは定かではない。

だがやはり、頭脳明晰な人はいつの世も存在し、様々な発明や開発、それが例え過去に存在し得たモノであってもこの世界においては重宝し、紙幣価格・価値が均一化されたとは言え、富を得るモノも数多く存在したが、その裏で、平等という言葉が薄れた世界において、虐げられる存在も数多く、明日すらも儘ならない人々も数多く存在した。

また、富を得たモノ達の間でも、より自分が高みを目指す為、他者を蹴落とすのも厭わず、世界には『殺し屋^{アサシン}』と呼ばれる職業の者たちが数多く出回った。同時に、それを快く思わない人々が集まり、対殺し屋として、『掃除屋^{スライパー}』と呼ばれる職業も存在するに至った。

これが今の世界の在り方である。

冒頭　く世界の在り方く（後書き）

実際問題、核戦争による規模であったり、放射能汚染による被害状況というのがどの程度なのかという点に関しては詳しく調べていません。

なるべく、リアリティを出そうと奮闘はしていますが………
難しいものです（汗

SIXの処女作、『Disorderly World　く無秩序な世界く』。

まだまだ文法などもめっちゃめっちゃですが、楽しんで頂ければ幸いですm（――）m

黒の章

窓からそつと風が部屋に舞い込み、頬をくすぐる。

寝るときは必ず窓を閉める習慣を持っていた彼にとって、その感触は不快で目を覚ましてしまう。

「窓を閉め忘れて寝ただろうか？」などと不信に思いながらも、人の記憶というのは得てして曖昧なものである。

気のせいだろうと自分で納得し、窓を閉めてベッドへ戻ろうと振り返る。

誰もが寝静まっている深夜2時頃……、小さな『カチャリ』という音がまるで世界中に響いたかのように大きく感じ、同時に額に突如現れた冷たい鉄のような感触が、寝ぼけていた頭を急速に冷まさせる。

それが拳銃であると気付いた時にはもう遅かった。

発砲音は余りに小さく、その音に気付いた者は誰も居ないだろう。だが間違はなく、彼にはその音が聞こえた……。気がした。残念な事に、その真偽を確認する事は彼にはもう一生涯出来ない……。

* * * *

既に営業時間の終了しているバーの扉が開き、室内には少し冷たい風が吹き込む。

一つだけ電球が点いているカウンターには白髭の男性が一人と、その手前のカウンター席に女性が一人座っているのが確認できる。カウンターの男性は、一瞬だけ視線を扉の男性に向けただけで、

二人は驚く素振りも見せはしなかった。それはまた、この来客が来る事を知っていた事実を物語っているという事でもある。

「シュウジ、どうでしたか？」

シュウジと呼ばれた男性はゆっくりカウンター席に向かい、女性の隣の席に腰掛ける。

「ああ、マスター……問題は無い」

マスターと呼ばれた男性は、そうですかとだけ呟き、シュウジの手前に1杯のお酒を差し出す。

ちなみに、マスターは『バーのマスター』という意味合いではあるが、シュウジを含め、彼の本名を知るものはいない。

「ライトコンツェルンのアッツォ・ヒルヴェラ氏って言ったっけ？」

隣の女性が、シュウジにそう話しかけてくる。だが、その視線は自分の持つカクテルグラスに注がれたままだ。

「次期幹部候補の男です。裏金を駆使して、今の社長を亡き者にしよう」と企んでいたようですね」

マスターは、カウンター内でグラスを拭きながら、女性にそう答える。このような会話であっても、マスターの表情は変わる事はない。営業スマイルはするものの、その表情が崩れる事はないのではないかと疑うほどの人物である。

「経緯や理由は関係ない、俺は依頼を遂行するだけだ」

同様に、シュウジの表情も変化する事は無い。

「報酬は指定の口座に振り込んでおきますよ」

マスターの一言を聞き、シュウジは手に持っていたお酒を一飲みし、席を立つ。

「ちよつと、シュウジ？ もう帰るの？」

「いいか、エジェリー？俺は仕事で疲れている。わかるな？」

エジェリーと呼ばれた女性は、ちえつと舌打ちをするがそれ以上の反論は出てこない。

それを確認したシュウジは、そのままバーを後にした。

「ちえ……付き合い悪いなあ、シュウジのヤツ」

「彼は人付き合いが苦手なのですよ。惚れているのであれば、根気が必要ですね」

マスターの一言に、盛大にカクテルを吹き出すエジェリー。

「ちよつと！ 私は……その、誰もシュウジに惚れてるなんて……」

顔を赤らめながら必死に否定する姿は、間違いなく誰から見ても肯定の意でしかない事をエジュリーは気付いてはいなかった。

世界には『殺し屋^{アサシン}』と呼ばれる職業が存在する。

富と権力がモノをいうこの世界において、他者を疎ましく思う者は五万と存在し、そこに殺意が生まれるのも、悲しくも自然の摂理なのかもしれない。

元々は、数百年前より存在した権力者の抱える暗殺者からの発展として、そのみを請け負う者達が蔓延^{まんえん}し、現在に至る。

シュウジもまた、殺し屋^{アサシン}として活動している一人で、仕事の依頼をマスターが請負い、シュウジとエジェリーはそれを遂行する、謂わばマスターの駒である。

他にもう一人、アラン・オールビーという男性もマスターの駒として存在しているが、バーに集まるのは決まりという訳ではないので、今宵は居なかったようだ。

* * * *

季節は8月を過ぎ、肌寒い風が世界を駆け巡る。

第四次世界大戦後、核戦争によって変化した地球の気候から、『真夏日』や『猛暑』と呼ばれる日は存在しない。それでも勿論、夏が消え去った訳ではなく、『海日和』なんていう言葉は存在はしているが、それも1週間前後しか続かない。

故に、この世界において9月に入れば、肌寒くなっていく事になる。

そんな寒空の中、シュウジは帰路に就く。

深夜の街はとても静かで、このご時世のこの時間に外を出歩く人は少ない。街の中心部は、巨大企業や富豪の宅地が存在し、深夜とはいえ多少は平穏であるが、中心部から離れた地域は無法地帯とまでは言わずも、秩序という言葉も薄く、深夜に出歩いていると、追いつきに襲われたり、場合によっては命を奪われるなんていうのもよくある話である。

そんな深夜をシュウジが歩けているのは、それ程腕に自信があるのと同時に、その格好のせいなのかも知れない。

過去に存在した多種族の血の混合種の中でも、一際珍しい程の黒髪であり、またその身なりも全身が黒尽くめ服で着こなされている。仕事の関係上、闇に紛れる事のできる色であると言う理由も一つだが、ファッションセンスのまったくないシュウジにとっては、黒以外を選ぶ気も無いというのもまた事実である。

ただ、今宵は特に誰かに出会うこともなく、自宅に着いた訳だが、
.....

羽織っていたロングコートを脱ぎ、部屋にある数少ない家具の中の椅子に背に投げ捨てる。朝にシャワーに入る時に着替えるのが日課の為、服は脱がずにそのままベッドに横たわる。

部屋には、生活に必要な最低限のモノしか存在しない。もともと、趣味の乏しいシュウジにとって色々なモノを買い揃えるという事に興味が無い。

1回の仕事で手に入る金は、それだけで数ヶ月を裕福に豪遊できるだけの額だが、シュウジは元々生まれた時から殺し屋^{アサシン}として育てられた為、その金で遊ぶことも無く、貯まっていくな一方である。

シュウジに親はいない。小さな赤ん坊の頃に捨てられたらしく、それを拾ったマスターが育てたのだ。物心ついた時からシュウジは殺し屋^{アサシン}として育てられた。世間に疎いわけではないが、感情が乏しく、『冷徹』や『機械人間』などと呼ばれることもある。

ただ、一切の趣味が無い訳ではない。前にエジリーに無理やり付き合わされた推理モノの映画を気に入り、それを観る為にテレビとDVDプレイヤーだけは購入した。それが発端で、推理モノの映画のDVDを数本だけ所有している。

ある意味、『唯一の趣味』と言えるかもしれない。

もはや、小さな時から人を殺し慣れたシュウジにとって、依頼遂行に感情は一切動かず、興奮する事も消沈する事もなく、ただ疲労からくる睡魔に身を委ねた。

わずか数秒で、部屋には寝息が漏れる。シュウジにとっては、この繰り返しだが『当たり前の日常』であつた……………。

* * * * *

「うん……………私ってそんなに、シュウジ好きだっ見えるのかな……………？ いや、そりゃ嫌いじゃないけど……………」

一人、うんうんと悩みながら深夜の町外れを歩いているエジエリの姿があつた。

自分がシュウジを好きなのかどうなのか？と問われるなら、好きだ。

だが、それが恋愛感情か？と問われると、分らない。

「私は・・・シュウジをどう思ってるんだろう・・・？」

シュウジと出会ってどれ位の月日が経ったか、もう正確には覚えていない。

始めは「生意気なヤツ」だと思っていたし、マスターからも「彼は感情が乏しい」と聞いていただけに、尚更『冷たい奴』という印象が先行していた。

でも月日が経つにつれて、シュウジはただ本当に『感情を表に出すのが苦手なんだ』と知った。

なんだかんだ言っ、私のわがままに付き合ってくれるし、食事に誘ったのは私なのに全額払ってくれたり。そんなシュウジを心の中で『無意識のプレイボーイ』なんて笑ってた。

「私は、いつの間にか・・・彼に惹かれてたのかな・・・」
「？」

この時、エジェリーの後ろを付け、襲おうと企む一人の男性が居たが・・・翌日、この男性は顔面が腫れ上がった状態で、街のゴミ捨て場で気絶してるのを発見されたのはまた別の話である。

黒の章（後書き）

く 人物紹介

『シュウジ・カザミ』

- ・ 本編の主人公の一人、殺し屋^{アサシン}として教育を受け、現在に至る。年齢は26歳。
- 愛用の銃は、オリジナルに改造された一品物で、装弾数5発の、消音に特化した仕様になっている。

『エジェリー・バルテルミー』

- ・ シュウジを同じく、殺し屋^{アサシン}の一人。活発で好奇心旺盛。両親は既に他界している。

『マスター』

- ・ バーのマスターであり、シュウジ達の師であり仲介者。本名や経歴は一切不明。

白の章

カーテンの隙間から日差しが差し込み、外では鳥の鳴き声が聞こえる。

ただ、彼が目を覚ました理由は鳥の声ではなく、同じベッドの隣から聞こえてくる女性の寝息であった。

枕元にある時計に目を見ると、『AM 6:49』と表示されている。いつもより早い起床であったと思うが、目覚ましをセットしなくても7時には目が覚めてしまうので、余り普段とは変わらないのかもしれない。

隣の女性の頭を一撫でし、男性は洗面所へと向かう。顔を洗おうと思ったわけだが、自分が少し寝汗をかいている事に気づき、そのままシャワーを浴びに向かう。

「ん………、ノア？」

女性は寝付きが悪いわけではないが、人の動く気配に目を覚ます。女性もまた、ノアと呼ばれた男性と同じく毎朝決まった時間に目が覚めるタイプで、この家にある目覚まし時計は使われることは無いという羨ましい二人である。

女性は辺りを見渡し、そしてシャワーの音が聞こえることに気づく。

なんとなくノア存在を確認できてやっと安心し、大きく伸びをしてコーヒーを淹れにいく。

朝のコーヒーは彼女の日課なのだ。ちなみに、ミルクはちょっと多めが好みである。

シャワーを浴びているとダイニングルームから物音がする。

「ん……？ クリス、起きたのかな？」
自分の物音で起こしてしまったかな？とちよつとだけ嫌悪する。

ノアとクリスティーナが出会ったのは今から6年前、よくありがちな『強姦に襲われていたところを助けた』という场景であった。その時、ノアに一目惚れし、告白もクリスティーナからであった。自由気ままに生きてきたノアは驚きはしたが、二つ返事でOKした。内心、クリスティーナに惹かれていたのは当人はまったく気付いてはいなかった。

この世界において、孤児・片親は珍しい事ではなく、この二人もまた独り身であった。

そんな背景が、現在の二人の同居に至る。

案の定、シャワーを終えてダイニングルームに向かうと、食卓でコーヒーを飲んでいるクリスティーナの姿があった。

「おはよう、クリス」

「ノア、おはよう」

クリスティーナはそう言うと、自分の座っている席の対面にカップを置き、ミルクを注ぐ。

「ありがとう」

ノアは、残念ながらコーヒーが飲めない。周りからは「子供だ」なんて言われるが、正直、あんな苦い飲み物の何が美味しいのか分からない。

ミルクを一口飲んでから、台所に着くのはノアの方である。クリスティーナは料理が出来ないと言うわけではないが、ノアは料理が趣味の一つであり、自ら「食事は俺が作りたい」と言い出したのだ。ハムと卵を焼き、野菜を添える。一口サイズにスライスされたパンを軽く焼き、これで朝食の完成である。

「今日の予定は？」

朝食を食べながら、クリスティーナがそんな事を訊いてくる。

「とりあえずこれ食べたなら、仲介者ところに行つて来るよ」

ノアの仕事は一般的に掃除屋スウィーパーと呼ばれている職業である。

街に多く蔓延はびこる殺し屋アサシンは、この世界においてもやはり恐怖の存在であり、特に富を持つ者達にとっては脅威以外の何者でもない。そんな富豪達が資金を出し合い、街で正式な職種として立ち上げたのが、この『対・殺し屋専門職業 掃除屋スウィーパー』である。

逆に言えば、そのような職業が正式化されるほど、街には殺し屋アサシンが数多く存在するという事でもある。

また、護衛を依頼したい富豪達とこの掃除屋スウィーパーとを繋ぐ者を『仲介者』と呼ぶ。これもまた歴れっきとした職業である。

勿論、依頼主が富豪だけとは言えないが、護衛の他に誰かが突き止めた殺し屋アサシンの住処に突撃するのも仕事の一つである。

世の中には、『情報屋』と呼ばれる裏家業も存在し、殺し屋アサシンの情報などを富豪に売りつける者も居る。故に富豪からの護衛依頼も成立する事になる。

「それじゃあ、出かけてくるよ」

朝食を終え、着替えを済ませたノアはそう一言残し家を後にした。
「あ………いつてらっしゃい………」

ノアを見送ろうとするも、とっとと出て行つてしまい、かけた言葉は空しく玄関にのみ発せられた。

ノアは、そそっかしいというか、ちよつとだけ抜けている。苦笑いしながらクリスティーナも家事に取り掛かるのであった。

* * *

「ああ、丁度依頼がある」

いつもの飲み屋の端の席で、ノアは仲介屋の男と話をしていた。単純にこの店は、いつも騒がしく、こういった話をするには逆に

都合が良いのでここが『いつもの場所』になっただけである。

「依頼主は、エドガルド・ボジャンキーノ氏。依頼時間は、今夜20時から10時まで。報酬は……。まあ、こんなモンだな」

男は、計算機に数字を打ち込み見せてくる。その金額は十分過ぎるほどで、並の一般人の1年分の収入に等しい。

この仕事の中では群を抜いて高額で、平均の倍近くの金額である。「ボジャンキーノ氏と言うと……。アレクサンドリア信用金庫の2代目代表取締役役か」

「父親の跡を継いだ、成り上がりのボンボンだよ」

仲介者の男は、やれやれと言った溜息交じりの言葉を吐く。

「裏では、高額利子の金貸しをやつてると聞くんが……。？」

「あくまでも噂さ、本当のところは分からんよ」

会社自体の信用は、父親の代で築いてきたモノがあるが、2代目には余り良い噂は聞かない。

「やれやれ、曰く付きの依頼主か……。だが、こつちも人を選んでちゃ仕事も出来ないから……。その依頼、受けよう」

渋々、といった感じで依頼を受ける。

「奥さんを持つのも大変だな」

仲介者はニヤけた顔をしながら、そう言い放つ。

「まだ、入籍してねえよ。んじゃ、資料は貰っていくぜ」

ノアは依頼主の情報が掲載された資料を持ち店を後にした。

店を出てすぐ、携帯を取り出し電話をかける。勿論、その相手はクリスティーナである。

「ああ、クリスか？ すまない、今夜依頼が入った。帰りは明日の昼頃になりそうだ」

いくら相手が彼女と言えども、依頼内容まで話すことは出来ない。といってもクリスティーナは、ノアが掃除屋である事は知っている。あくまで話せないのは、依頼主のプライバシーに関する事であり、

つまりは個人情報保護という事である。

「ああ、ああ……大丈夫だ、無理はしないよ。ああ、それじゃあまたな」

用件だけ伝え、依頼主の元へ向かう。護衛開始時間が20時からだと言っても、その前に依頼主から詳しい話を聞かなければならないというルールがあるからだ。

といつても、大抵の富豪は自慢話に勝手に花を咲かせるのがオチなのだが……。

到着してみれば、予想通りの场景が広がる。まさに富豪にありがちな豪邸、依頼主もふつくと太った、まるで苦労なんて言葉を知らないような風体を携えている。

「君が『白龍』^{バイロン}かね？ 噂は聞いているよ」

『白龍』とは、掃除屋業界のノアの通り名である。由来は単純にノアの着ている真っ白なジャケットの背中に昇り龍が描かれているからだ。

その真っ白なジャケットに加え、綺麗に透き通った金色の髪はまたノアが目立つ要因の一つである。

仕事の成功率90%以上であり、掃除屋の中でも1〜2位の实力と名高い。そして、この見た目が相まって、その業界では知らぬ者は居ないとまで言われている。

「その呼び方、好きじゃねえな。だが、噂される程度の期待には応えるつもりだぜ」

軽く敷地内の説明と依頼の概要を話し、これもまた予想通りの自慢話が繰り広げられる。

半分呆れながらも、相手は大富豪。機嫌を損ねない為に、話は聞いておかなければいけないのが辛いところでもある。

案の定というか、自慢話も尽きぬまま予定の20時を回る。かれこれ6時間を越える壮絶な自慢話であった上に、当人もまだ話した

り無いといった感じではあったが、渋々と夕食の席へと向かう。
ただ、出されたお茶請けが美味しかったのが、唯一の救いかもし
れない。

本来であれば、依頼遂行時間の1〜2時間前には屋敷内を見て周
り、その地図を頭に叩き込みたいのだが、ここは有名な人の辛いところ
で「君ほどの腕があれば大丈夫だろう」と、いつも自慢話に付き
合わされる。

その『腕』を振るう為にも、下準備が必要不可欠なのだが・・・。

仕方なく、この時間から屋敷内の構造を見て回る。『自分がもし
もこの主を狙うなら、何処から進入するか』という思考を張り巡
らせる。

ただ、ここで問題なのは、『情報屋』の存在だ。つまり、今日現
れるであろう殺し屋には「今、この屋敷には掃除屋スウィーパーが居る」という
情報が十中八九流れていると思っただけで間違いない。つまり、向こう側
もより一層警戒してくるという事である。

だが、ここで自分の認知度が役立つのだが、有名であるが故に、
信頼を置く依頼主も多い。

つまり、依頼主の寝室で見張ることが許されるというメリットが
あるのだ。

では何故、万人がそれを許されないかというのは、物凄く単純な
話で、一時は殺し屋アサシンが掃除屋スウィーパーに変装して、任務を遂行していたとい
う事実があるからである。当時は、お陰で掃除屋スウィーパーの信用もガタ落ち
だったと聞かすが、それはあくまでも自分が生まれる前の話のようだ。
ただ、故に新人や無名の掃除屋スウィーパーは、依頼主の寝室での張り込みが
出来ないというわけである。

それこそ、身を危険に晒しているのだと思うのは、ノアだけでは
無いだろう・・・。

時刻は既に、深夜2時を回っている。依頼主の寝息が聞こえる寝室の物陰に隠れ、様子を伺う。

極稀に、『殺し屋は来ませんでした』なんていう場合もあるが、気を抜く訳にもいかない。ただ、ちよつとは頭の中で「来ないのか？」と考えてしまいが、本当に僅かな物音がその幻想を打ち砕いてくれた。

注意しなければ分からない程の小さな足音。逆にこれほど巧妙に足音を消している人物が、屋敷内部の人間では無い事を物語る。

どうやら、殺し屋は窓から侵入したようだ。相変わらず驚かされるのは、窓の開閉の音が聞こえないところだろう。どうしたら、その技能が身に付くのか知りたいところではある。

足跡はゆつくりとベッドに近付く。ノア的位置から、殺し屋の姿が黙認出来る。どうやら、向こうはこちらに気付いていないようだ。殺し屋は、懐から、拳銃のようなものを取り出し、ベッドに向ける。

正直、ノアは呆れた。あの殺し屋は間違はなく、初心者だ。そうでなければただのバカだ。

何故なら、ノアは例の白いジャケットを脱いではない。つまり、いくら物陰に隠れているとは言え、闇の中であろつと用心深くいれば、このジャケットが目につかない筈は無い。

本来は、このジャケットに気付いた一瞬の隙を付いて、攻撃に転じようと思ったのだが・・・これでは、自分の方が道化だ。

注意深くしていれば分かるほどの、小さな発砲音が聞こえる。消音効果の付いた拳銃なのだろうが・・・。そこすらも呆れる。依頼主は、残念ながらこの部屋では寝ていない。部屋に聞こえる寝息は、テーブルコーダから再生されているモノであり、依頼主は別の部屋で寝ている。

そんな事を要求できるのも、有名人の特権であるが・・・。

それより何より、発砲する前に暗殺対象が本当にそこで寝ているのかを確認するべきではないだろうか？

今まで数多く対峙してきた殺し屋の中でも、最低ランクに部類する。ちなみに、これよりも酷かった「素人か？」と思える人たちも何人も見てきているのだが……。

とにかく、こちらは護衛者ではない。掃除屋なのだ。このまま殺し屋を帰らせる訳にもいかない。

踵を反す殺し屋に、「死亡確認しろよ……」など内心呆れつつ、殺し屋に向かって走り出す。

やはりというか、殺し屋はノアが存在にはまったく気付いていなかったらしく、驚いたのか硬直する。

ノアの武器は、『カタナ』である。その昔、何処かの島国に存在していたと言われる切れ味に特化した剣。空中の弾丸をも切り落とせるほどのその切れ味と、そして形状に惚れ込んだノアは、出会って以来、愛用の拳銃を捨て、これ一本でこの世界を生き抜いてきた。一瞬の近接攻防において、拳銃を構えるよりも早く相手を斬り捨てる事が可能であるが……どうやら、相手は本気で硬直しているようだ。一切、こちらに拳銃を構えようとしなない。

一つだけ富豪の家に感謝出来る事は、部屋が広い事である。つまり、カタナを大きく振れるからだ。

そんな言葉をこの世界の住人は知らないが、『居合い抜き』の如く相手の首に目掛けてカタナを振る。

そのままの勢いで、相手の首元にポケットから取り出した厚手の布を相手の首に掛ける。あくまで、血飛沫が部屋を汚さないように配慮である。

一連の動作の勢いが余って、半回転したノアの背から、硬い物が地面に落ちる音が部屋に響く。つまりは、殺し屋の首である。

任務完了と言いたい、あくまで朝10時までの契約なので、事を使用人に伝え、時間まで見張りを続ける。

だがその日は、それ以上の事は無かった。

今回出会った殺し屋は完全な素人であつたが、実はそれは珍しい事ではない。

その多額の報酬か、或いは『かつこいい』という理由なのか、殺し屋になりたがる者は多い。中には組織ぐるみではなく、個人でその家業をしているものも少なくないのだ。

裏を返せば、世界がそれほど殺し屋という存在を認めているという事にもなる。

それが、今の『実態』なのだ。

「流石は、噂に名高い『白龍』だ。見事だったよ。報酬は、掃除屋連合本部の方に支払つておくよ」

依頼主は高笑いしながら、ノアの背中を叩いてくる。信頼の証のつもりか分らないが、少し痛い。

「その呼び名は好きじゃねえって言っただろ。だが、これで任務完了だ、俺は失礼する」

「また何かあつた時は君に宜しく頼もう」

部屋を出ようと歩き出したノアの背中に、依頼主がそう声をかけたが、ノアはそれには反応せず、部屋を後にした。

こんな仕事をしている人間がこう言うのもおかしい話だが、気分が悪い。人を殺しておいて、無感情でいられる程ノアの神経は図太くない。

だが、これもまたノアの『日常』である。

そんな気持ちを抱きつつ、ノアは最愛の彼女の待つ自宅へと向かうのであつた……。

白の章（後書き）

く 人物紹介 2く

『ノア・アンダーソン』

・ 本編の主人公の一人、正義感を抱いて掃除屋^{スウィーパー}となる。
年齢は24歳。

愛用している武器は『カタナ』で、骨董品屋で一目惚れして入手した。

『クリスティーナ・ラローチャ』

・ ノアの彼女。

生活には困っていないが、社会勉強の意味でアルバイト中。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5232y/>

Disorderly World ~ 無秩序な世界 ~

2011年11月17日03時26分発行